慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エンゲルスの原始家族論
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.12 (1927. 12) ,p.1613(1)- 1655(43)
JaLC DOI	10.14991/001.19271201-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19271201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田學會雜誌　第二十一卷　第十二號

エンゲルスの原始家族論

加田哲二

一

マルクシズムにおける歴史觀は、その個々の歴史的時代の研究に先き立つて形成せられてゐるのである。エンゲルスは「共産黨宣言」の英譯版序文において次の如くいつてゐる。「この宣言は吾々の共同産物であるが、宣言の核心を形成する根本命題はマルクスのものであることを聲明すべき義務を感ずる。この命題は次の如くである。すべての歴史的時代において、當時行はれてゐる經濟的生産並に交換及びこれから必然的に發生する社會組織が、この上に建設せらるゝその時代の政治的並に知的歴史の基礎をなし、且つそはこれによつてのみ説明せらるゝのである。從つて土地を共有してゐた原始的民族社會の解體以來の人類の全史は

T. M. & CO.,
HIGH GRADE TAILOR
NO 5 SHI KOKUMACHI MITA SHIBA
TEL. TAKANAWA 6289

テーエム洋服店
東京市芝區三田四國町五番地
電話高輪六二八九番

メガネ
の御用は
正確にして
廉價な

慶應義塾大學病院指定
紫鳳堂眼鏡店
麻布材木町電停際
電話青山七四七〇番

階級闘爭の歴史であつた。搾取階級と被搾取階級、支配階級と被抑壓階級の抗爭であつた。而してこの階級闘爭の歴史は進化の連續であつて、今日においては、被搾取、被抑壓階級たるプロレタリヤが、搾取、支配階級たるブルヂョアジイの支配から、自らを解放すると共に、同時に、社會全體をすべての搾取、抑壓、階級區別、階級闘爭から一擧にして解放せざるを得ない階段に達してゐるのである。この命題は、余の見るところによれば、生物學に對してダアウイン學説のなしたところを、歴史に對してなすべき運命にあるのであるが、吾等二人は千八百四十五年の數年以前に徐々とこの學説に近づいた。余が獨立でどの程度までこの學説を形成したかは、拙著『英國勞働者階級の狀態』に最もよく現はれてゐる。しかし、余が千八百四十五年の春、ブルュセルにおいてマルクスに會つたときは、彼は既に余がこの文章において述べたやうな明確な言辭で、この學説を表現し、これを余に示したのである。」

かくの如き一般歴史的過程に關する命題が個々の歴史的時代の研究に先き立つて成立したのである。エンゲルスは以上の引用文に述べたやうに産業革命における英國勞働者階級の狀態を觀察することによつてこれに達した。マルクスは彼が經濟學批判の序文中に云つてゐるやうに、千八百四十二年から四十三年に至るの間ライン新聞において所謂經濟的利益の問題を批判する必要に會し、從來自己の修得した學問の不充分なるを悟り、巴里において、經濟並に法律問題を研究したときにこれを得たのである。曰く「私を惱ました問題の解決の爲めに企てた最初の勞作はヘエゲル法律哲學の批判的檢討であつて、その序論は一八四四年巴里で公にせられた『獨佛年誌』に現はれた。私の研究は、法律關係並びに國家形態は、それ自身によつて理解さるべきものでもなく、また所謂人間の精神の一般的發展によつて理解さるべきものでもなく、寧ろそれは、物質的の生活關係にその根據を有するものだといふこと、而もこの市民的社會の解剖的研究は之を經濟學に求むべきものだといふこと、の結論に達した。……」かくして、マルクスは彼の研究の導きの絲となつたところの一般的結論に到達したのである。（宮川氏の譯文借用）

マルクスの研究は主として經濟學的方面であつて、その大著『資本論』において研究對象とせられたものは、資本制生産方法とそれに照應した生産事情並に交換事情とである」。かくの如くにして、マルクス、エンゲルス兩者の研究は主として資本

制的社會に限定せられてゐるやうである。勿論「共産黨宣言」は歴史的時代一般、即ち古代から近代ブルジョア社會にいたるまでの歴史的發展の一般を論じてゐるが、その主たる對象は所謂市民的社會であつて、それまでに達するすべての歴史的過程をすべて階級闘爭の歴史として論斷した。而して、ブルジョア社會の終焉によつて、人間社會の前史を終り、階級闘爭なき社會に入るのである。然るに、後のエンゲルスの研究によれば、人間社會はその發端において階級なき社會的生活をなしてゐたのであつた。故に、彼は共産黨宣言の冒頭の一句「從來の歴史は階級闘爭の歴史である」といふ命題に對して、訂正を試みてゐる。曰く「即ちそはすべての記錄せられた歴史である。千八百四十七年においては、社會の前史、記錄せられた歴史以前に存在してゐた社會組織が全然知られてゐなかつたのである。それ以後、ハックスタウゼンはロシヤにおける土地共有を發見し、マウラアは土地共有をもつて、すべてのチュウトン民族が歴史の始めにおける社會的基礎であることを論證した。かくて、徐々に、村落共産體がインドからアイルランドに至る何處においても、社會の原始的形態であり、且つあつたことが判明した。この原始的共産社會の内部的組織は、その基本的形態において、氏族並にその種族に對する關係の眞の性質に關するモルガンの光輝ある發見によつて、明かにされた。この原始的社會の解體をもつて、社會は分離せる、しかも遂には敵對せる階級に分岐し始めたのである。余は拙著『家族、私有財産並びに國家の起源』において、この崩壞過程を再び迹ることを試みたのである」。

このエンゲルスの「家族、私有財産並に國家の起源」（Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staates im Anschluss an Lewis H. Morgans Forschung 1884）は始めて、マルクス的方法をもつて、原始社會、即ち國家發生以前の社會を取扱つたのである。從來資本制的生産方法の研究に沒頭してゐたマルクス＝エンゲルスはルイス・モルガンの「古代社會」（Lewis H. Morgan, Ancient Society or Researches in the Lines of Human Progress from Savagery through Barbarism to Civilization 1877）の刊行によつて、刺激せられて、彼等の唯物的方法を原始的社會の研究に對して、試みやうとしたのである。エンゲルスはその著の第一版序文（千八百八十四年版）の中に彼の著述とマルクス及びエンゲルスとの學的關係について次の如くいつてゐる。「本書はある意

味での遺言執行である。カアル・マルクスこそ、實にモルガンの研究の結果を彼の――ある限度内においては吾々の――唯物的歴史研究と結びつけて、記述し、そしてはじめて、その全意義を明かにしたいと考へてゐたのである。洵にモルガンはマルクスによつて四十年前に發見された唯物史觀をアメリカにおいて彼自ら新たに發見し、そして野蠻と文明との比較において、主要なる諸點でマルクスと同一の結果に到達したのであつた。……本書はたゞわが故友にこれを成就することが許されなかつたところのものに對して、僅かの補充をなすに過ぎないものである。然し、彼れのモルガンからの抄錄中には批判的な脚註があつたので、私はそれをこゝに出來るだけ再錄した。」

エンゲルスの「家族、私有財産並に國家の起源」は以上のやうに他の多くの著述と同じやうに一のマルクスとの共著と見ても差支のないものであり、從つて、これらの問題に關するマルクス主義の代表的見解がこゝにありと見られてゐるのである。例へば、家族その他に關するクノウ（Cunow, Die Marxsche Geschichts-, Gesellschafts- und Staatstheorie）國家に關するニコライ・レニン（Lenin, Staat und Revolution）村落共産制に關するマサリック（Masaryk, Philosophische und soziologischen Grundlage des Marxismus.）の論述批判は皆このエンゲルスの著述をその對象としてゐることによつても、その一斑を知ることが出來るであらう。筆者はこの著述中から家族に關する彼の意見を抽出し來て、研究の對象としやうと思ふのである。

二

家族に關するマルクシズムの意見はエンゲルスの著述によつて組織的に說述せられたのであるが、その以前において、マルクスの家族に關する意見が存在しなかつたのではない。モルガンの著述が發表せらるゝ以前においても、マルクスはその家族に關する意見を持つてゐた。たゞモルガンの著述の刊行はマルクシズムにおける家族觀を根本的に變改せしめ、且つ決定せしめたのである。

國家、民族、階級等はマルクスの見解によれば、共同生活において、比較的後に成立した構成體である。社會的構成體のあるものは、これらの構成體に先行し、且つそのあるものは、變改せられた形態において、今日においても、存續してゐるのである。家族の如きはそれである。

社會學史を繙いて、その成立期における社會學的思想を觀察すると、社會生活の始源を孤立人に求め、この孤立人が後に互に結合し、一定の共同生活の規定を定めることによつて、社會的生活を開始したと考へたのである。社會契約說がこれであつた。然るに、社會學的思想の發展は、社會生活の始源を孤立人に求めずして、家族の擴張並に分岐に求める學說を發生するに至つた。この說によると、個々の家族は、徐々に、先づ血族團體に、次いで、種族に、遂には民族に發展し、政治機關の發生と共に、政治的社會または國家たるに至るのである。この家族をもつて社會の始源とする說は、父權の支配を有する個別的家族を原始的家族とした、即ち父權的個別家族をもつて最初の家族形態とし、この父權的大家族即ち家族的種族において、社會並に國家の眞の原始的形態を見たのである。（拙稿近世社會學成立史、社會經濟體系第十、十一卷參照）。

マルクス＝エンゲルスの思想的出發點となつたヘエゲルは、大體において、家族からの社會の發達に關する說を採り入れてゐる。ヘエゲルは家族において、既に少規模においてゞはあるが、國家の特徵とするところのものを見たのである。家族においては、個人は孤立人ではなくして、彼の上に位する全體の一員である、何となれば、家族は性的本能の充足並に子供の養育を目的とするのみでなく、家族の意義は遠く、性的關係以上に出てゐるからである。家族は一の法的道德的人格的統一體であるのみでなく、同時に、一定の財產所有（家產）を有する經濟的共同體である。

家族はその發展過程において、一の新らしい萠芽を置いた。而して、この萠芽は家族から分れて獨立するのである。かくの如くして多數の家族が成立し、この多數の結合が種族及び民族を形成する。この過程と共に、個別的家族は、自ら分岐する。家族の自然的欲望は增加し、その成員は獨立するに至る。かくてこれらの成員はその欲望を充足するために、家族結合から離れて、他の家族の成員と相互關係を結ぶに至る。彼は、かくの如くして、高度の團體的統一體に結合せらるゝのである。しかして社會は成立する。何となれば、すべての社會の最も重要なる內容は、多くの個人的欲望を媒介し、相互の勞働によつてこれを充足することにあるからである。家族の擴張並に分岐によつて、一方においては種族並に民族が成立すると共に、他方においては、欲望充足の結合の結果として市民的社會は成立するので

ある。

カアル・マルクスはその青年時代において、家族についてヘエゲルと同じ見方をしてゐたやうである。マルクスは、原始的家族をもつて、父權的個別的家族と見、この家族の增加並に分裂から種族及び民族は發展したものと見た。故に、彼は種族を家族の血族的擴張と見てゐるのである。この見解は彼の「資本論」においても見ることが出來る。曰く「先づ一家族、更らに進んでは一種族の內部に男女及び年齡の差異に基くところの、換言すれば、純生理上の基礎に立つ所の原生的分業が生じて來る。此分業の材料は共同體が擴大されて、其人々が增殖するに從ひ、特に異種族間の衝突から延いて、一種族による他種族の征服が行はれるにつれて、ます〳〵增大するものである。……蓋し、文化の初期においては、私個人ではなく、各家族、各種族等が夫々個別的に相對立するからである」。（資本論第一卷高畠氏譯四四八頁）

「經濟學批判」に對する「序說」においても、同じやうな見方を發見する。曰く「吾々が歷史を遡れば遡る程、個人、從つて生產を行つてゐる個人が獨立的でなくして、一の大なる全體、始めは、全然自然的に家族及び種族に擴大せられた家族に從屬し、後には、種族の對立並に融合から發生し來つた種々な形態における共同體に從屬してゐる。」この「經濟學批判序說」は勿論千八百五十九年以前に執筆せられたものであり、前掲資本論中の一句はその初版（千八百六十七年）並に第二版（千八百七十三年）に至るまでマルクスによつて支持せられた意見であつたが、同書の第三版（千八百八十三年）においてはエンゲルスによつて次のやうな補註が加へられるに至つてゐるのである。曰く「著者は後に至り、人類の原始狀態について試みた極めて根本的な研究によつて左の結論に達した。即ち本來家族が種族に發達したのではなく、寧ろ反對に種族の方が血緣を基礎とする人類社會の本源的形態となつたものであつて、種族結合の分體し始めたとき、茲に漸く種々雜多な家族形態が發展し來つたのである。」（高畠氏譯本四四九頁）かくの如く後年に至つて、マルクス＝エンゲルスは始めマルクスの懷いてゐた考へとは正反對の結論に到達した。

マルクスの家族觀はヘエゲルを繼承して、こゝに止まつたのではない。マルクスは父權的家族が既に早く家長的大家族に推移し、この家族も種々な發展形態を經過した點を認めたことによつて、ヘエゲル以上に出でゝゐる。ヘエゲルは單に、

聖書に記述せられた猶太的家長的家族並び羅馬の古家族とを認め、これらの家族もまた原始家族の單純なる擴張に過ぎない家族形態として見たのである。而して、ヘエゲルは家族をもつて、史的發展の產物なりとする見解に對しては何等貢献するところがない。然るにマルクスにあつては、古代愛蘭土並に印度の經濟狀態の研究に際して、こゝに行はれた家族共同體に逢着し、この中に直ちに、過去における家族發達の系列的形態を見たのである。マルクスは經濟の發展過程に消解し來つた、種々な經濟形態に適應する種々な歷史的家族形態を認識した。故にマルクスにとつては、現在の資本主義的社會における家族は何等自然的のものではなくして、他の家族形態がこれに先行し、また何時かは他の形態がこれに次ぐべき一の發展の產物なのである。故に「資本論」第一卷に曰く、

「資本制度の內部に行はれる舊來の家族制度の分解は如何に恐しく厭なものであらうとも、大工業なるものは、それが家庭の範圍外にある社會的に組織された生產行程の內部において、婦人や靑年男女や幼童などに割り當てる極めて重大な役割をもつて、家族及び男女關係のヨリ高級な一形態の依つて立つべき新たなる經濟的基礎を造り出すのである。キリスト敎的チュートン的家族形態を絕對視するは、古ローマ的、古ギリシャ的、又は東洋的家族形態――此等の家族形態は又相互に一つの歷史的發展系列を成すものであるが――を絕對視すると同じく迂愚な沙汰であるは言ふ迄もない。」（高畠氏譯本六四四頁）

原始社會の構成については、マルクスはヘエゲルと同じやうに考へた。即ち個別的家族及びこれから發達した家族共同體の內部において、漸く分勞が增加し、欲望が增進した、かくてこれらの團體はその生產物を相互に交換し始め、相互に經濟關係を結ぶに至り、これが一般化するのである。たゞヘエゲルとマルクスと異るところは、ヘエゲルが交換が元來個人によつて行はれ、從つて相互關係を個人的種類のものと見たのに反して、マルクスは最初から種々なる家族並に家族の團體そのものが相互に接觸するに至つたと說いた點であり、この點においてマルクスは正鵠を得てゐたのである。

以上がマルクスの家族に關する學說であつた。マルクスは少くとも千八百七十八年または千八百七十九年までこの考へを持つてゐたのである。然るにマル

クスはこの年に前掲のモルガンの著述「古代社會」を繙讀するに及んでマルクスの家族觀は一の革命を經驗した。マルクスはモルガンの著述を熱心に研究することによつて、自己の研究とモルガンの研究との綜合を試みんとした。このためにマルクスはモルガンの著述から幾多の拔萃を作り、これに注意、說明、批評を加へてゐた。マルクスの重り行く病は遂に彼をして、原始社會に關する著述をなすことを許さなかつた。エンゲルスは彼に代つて、この業を成し遂げた。それが彼の「家族、私有財產並に國家の起源」である。これ、エンゲルスがこの書の刊行をもつて一の遺言執行であるといつた所以である。（この項主としてクノオ前掲八二―八六頁による。）

三

エンゲルスの著述はその表題の明かに示してゐる通り、ルイス・モルガンの研究を基礎とした原始社會に關する研究である。エンゲルスはこのモルガンの著述の出現によつて原始社會に關する血族關係が白日の下に齎らされたものとし、從來この書を唯一の權威としてゐるのである。彼以後の多數の社會主義者も原始社會を語る場合には先づエンゲルスを、次にモルガンを引用するのが例になつてゐる。エンゲルスはモルガンの著書を評して「吾々の記錄せられた歷史の前史的基礎をその主要部分において、發見し、これを改造し、最古のギリシヤ、ロオマ並びに獨乙史の最も重要にして從來解くこと能はざりし謎を解明すべき鍵を北米印度人の血族團體中に發見したのはモルガンの大なる貢獻である。彼の著述は一夜漬の代物ではない。彼は四十年も、彼が充分にこの問題を會得するまで、その材料と鬪つたのである。故に彼の著述は現代において數少き劃期的著作の一である」とし、更らにまた「ルボックの後直ちに、即ち千八百七十一年にモルガンは生新な然も多くの點において、決定的な材料をもつて現はれた」と評し、續いて、「原始的母系氏族が文明國民の父系的氏族の第一階段であつたといふ發見はダアウインの進化論が生物學に、マルクスの餘剩價値論が經濟學に對すると同樣な意義を原始時代の歷史に對して有する」として極力その發見を讃美してゐる。

乍併、エンゲルスはモルガンのみの原始社會論を研究したのではない。彼はモルガン以前の古代社會史家の所論を窺つたのである。エンゲルスに從へば、原始

的家族史の第一頁は千八百六十一年バッハオオフェンの母權論（Bachofen, Das Mutterrecht）の出版をもつて始まる。バッハオオフェンは古代社會において、何等拘束なき性交生活が行はれたことを承認し、この形態の性的關係を娼婦制（ヘテリスムス）Hetärismus と呼び、この事實から所謂母權說（Mutterrechtstheorie）が唱道せられ、原始社會における女性の支配（Gynaikokratie）の存在を主張した。而して、この母權的家族制から父權的家族制への變遷推移の原因を宗教思想の變化に求めた。唯物史觀の立場にあるエンゲルスがこれに滿足しなかつたのは勿論である。彼は神秘主義が到底社會現象を說明し得ずと考へたのである。

バッハオオフェンは獨乙人で、その著書は獨乙語をもつて綴られた大部のものであるが、彼は獨乙においても少しも認められなかつた。彼と何等の交渉なくして現はれたのが英人ジェ・エフ・マックレナン（J. F. McLennan, Studies in Ancient History 1886）はバッハオオフェンのやうに神秘的色彩なく、詩的想像のない理智的な法律家であつた。彼は古代の社會において掠奪婚姻が存在し、またある種族においては種族內部の婚姻が禁止されてゐる事實から、その種族內の男子は他の種族の女子と婚姻を結ぶ所謂族外婚姻（Exogamie）の存在したことを論じた。然るに他方の種族はその種族の內部においてのみ婚姻を結ぶ習慣が行はれてゐる。彼はこの制度を呼ぶに族內婚姻（Endogamie）をもつてし、族外婚姻の種族と族內婚姻の種族とを對立せしめてゐる。而して彼はこの族外婚姻の原因を野蠻人間における女兒を殺す習慣に求めてゐる。この結果女子の數不足し、これを他種族に求めざるを得ざるに至り、更らに一人の女子に對して數人の男子の相通ずるに至り、こゝに一妻多夫の狀態を出現し、母系尊重の習慣を生むに至つた。マックレナンの功績は族外婚姻の重要と明確ではないにしても母權尊重の習慣を認めたことである。けれども、彼の缺點はこの母系習慣の盛時から血族間において父系の承認せられたことを認めなかつたことである。

マックレナンの次に擧ぐられるのは、ラボック（Lubbock）である。彼はその「文明の起源と人間の原始狀態」（Origin of Civilization and Primitive Condition of Man, 1870）において、團體婚姻の事實的存在を承認してゐる。モルガンの「古代社會」が出版せられたのはその翌年千八百七十一年のことである。エンゲルスはこの書に從つて

原始社會に關する議論を進めたのである。

四

「モルガンは人間の前史に專門的知識をもつて一定の順序を與へやうと試みた最初の人である。この上著しく多くの材料が現はれて、變更を必要とするに至らぬ限り、モルガンのこの分類は確かに長く行はれるであらう」とエンゲルスはいつてゐる。かくて彼はこのモルガンの人類發展の時期の分類を採用した。この分類は生活手段の生産における進歩の程度に從つたものであつて、この分類の根據として、モルガンは次のやうにいつてゐる。「この生産における熟練は、人間の優越及び自然征服にとつて決定的のものである。すべての生物のうちで人間のみが、營養手段の生産に對する殆ど無條件の支配にまで到達するに至つた。人間の進歩のすべての大なる時期は、生活資源の擴大の時期と多かれ、少かれ直接に一致してゐる」と。その時期の分類とは一、蒙昧（Wildheit）二、野蠻（Barbarei）三、文明（Civilisation）であつて、モルガンの注意を惹いたのは、蒙昧、野蠻、並びに野蠻から文明への過渡の時代であつた。

これらの人類發達の三時期の一般的なる特徴を記すれば次の如くである。蒙昧――主として出來合ひの自然的生産物を獲得する時代　人間の技術的生産物は主としてこの獲得を助ける道具である。野蠻――牧畜及び耕作の知識を得る時代。人間の勞働によつて天産物の生産を高める方法を學ぶ時代である。文明――天産物のより以上の加工、特殊産業及び技術を學ぶ時代である。モルガンは彼の研究の對象とした蒙昧及び野蠻の時期をその生活手段の生産の進歩に適應した三期、即ち下期、中期及び上期に區分してゐる。その各々について記せば次の如くである。

蒙昧下期。人類の初期であつて、人類は熱帶または亞熱帶の森林に居を構へ、その食とするところは、果實、堅果、細根であつた。この時期の人類の最大の産物はその言語である。人類のこの時期は數千年の長きに渉つてゐるが、その直接の存在の證據は存しない。けれども人類の祖先がある動物であることが發見せらるれば、吾々はその存在を論理的に承認しなければならぬ。

蒙昧中期。この時期は魚類の利用と火の使用とをもつて始まつてゐる。この

新食物のために人類は氣候と地理的環境とから完全に獨立することが出來た。而して人類はこの時代において、河川の流域と海岸線とに從つて、諸方に散布せられた。不完全な初期石器時代の石器は多くこの時代に屬するものである。

蒙昧上期。この時期は弓矢の發明をもつて始まつてゐる。この時期は人類がその常食として鹿肉を求め、狩獵をその平常の業としてゐた時代である。弓矢の如き比較的複雜な器具の發明は、多くの經驗と高度の知識とを必要とする。從つて、この時期において、この外の發明もあつたものと推定して差支ないだらう。武器の點に文明發達の各階段の特徴を求めるならば、蒙昧時代には弓と矢、野蠻時代には鐵の刀、文明時代には銃砲が適應する。

野蠻下期。この時期は陶器を作る技術の行はれた時に始まつてゐる。この技術は耐火用として木器の上に粘土を塗ることにその起源を求めることが出來る。野蠻時代以前までは吾々は一定時期における進化過程を一般的にすべての民族にその地理的環境を考量に入れずに論ずることが出來た。けれども吾々は野蠻時代の創始と共に兩大陸の自然的資源の相異を認めなければならない階段に達したのである。

野蠻中期。東半球においては動物の馴化と飼養、西半球においては食用植物の栽培と灌漑とを以て始まり、また建築用として石と日光で乾した煉瓦（アドオベ）とを用ゐたのがこの時期の始まりである。西半球においては玉蜀黍、南瓜、甜瓜が栽培せられ、これらの植物が彼等の主食物となつた。彼等は防禦工事のある村を形成し、木造家屋に住んでゐた。金屬は鐵を除いては種々なものが使用されてゐた。東半球においてはこの時期は乳と肉とを供給する動物を飼養した時に始まつてゐる。植物の栽培はまだ知られてゐなかつたやうである。

野蠻上期。鐵鑛の溶解に始まつて文字の發明とそが記錄のために利用された文明時代に入る間の時期がこれである。この時期における生產の改善進步は過去のすべての時代を綜合したよりも大である。ギリシヤの英雄が活動し、ロオマの建設せらるゝ少し以前のイタリヤ民族、タシトス時代の獨乙民族がこの時代に屬するのである。

五

蒙昧、野蠻、文明における男女關係の形態如何が、家族論の最も重要な部分を占めるものである。エンゲルスはモルガンに從つて、これを五つに分ち、その一を拘束なき性交生活の狀態、その他の四を家族形成の狀態とした。四つの形態の家族とは(一)血緣家族（Die Blutsverwandtschaftsfamilie）(二)團體家族またはプナルア家族（Die Punaluafamilie）(三)配偶家族（Die Paarungsfamilie）(四)單婚家族（Die monogame Familie）である。

無拘束なる性交 regelloser Geschlechtsverkehr とは現在又は以前に行はれた性交に關する禁制の障壁が存在しないことを意味する。即ちそは一の人類原始の狀態であつて、一種族の內部において、無規律な性交が行はれ、從つてすべての女子はすべての男子に、すべての男子はすべての女子に平等に所屬するといふ狀態である。即ち男子は一夫多婦制に生き、同時に彼等の妻は多夫一婦制に生き、從つて、その共通の子供もまた彼等すべてのものに共通のものとせられる狀態である。無規律といふのは、後に習慣によつて設けられた制限がまだ存しなかつたといふまでのことで、斯くの如き狀態の下においても決して、一時的な一夫一婦制があり得ないことではないのであつて、そが未だ習慣として固定しない狀態にある。

かやうな性的關係の狀態においては、人類は群團（ホルデ）において生活してゐた。この群團において人類はまだ家族を形成してゐないのである。群團と家族とは高等動物においては、互に補充するものではなくして、對立するものである。エスピナスが云ふやうに家族が緊密に組織されてゐるところでは、群團はたゞ稀な例外として形成されてゐるのみである。これに反して自由性交または一夫多婦制が行はれてゐるところでは群團は殆んど自然に發生する。而して、動物狀物から脫して發達するため、自然の指示する最大の進歩を遂げるためには、個體に缺けてゐる防禦能力を群團の團結力と協力とによつて補ふことが必要であつた。かくて、人類最初の共同生活形態は群團であり、その內部においては、無規律なる性交が行はれてゐたのである。

エンゲルスはこの無規律性交狀態の存在の否定に關するルツルノウ及びウエスタアマアクの論證に對して、可成の合理的根據をもつて、これに答へてゐるのである。

この無規律性交の原始的狀態から家族が發達した。その第一が血緣家族である。血緣家族においては、婚姻集團は世代によつて、區分せられる。即ち家族内において、すべての祖父母は殘らず互に夫婦であり、それらの子供、即ち父母もまた互に夫婦であり、更らにその子供達は共同配偶者の第三群をなすのである。從つて、この家族形態においては、祖先と子孫即ち親と子のみが相互に婚姻關係から除外せられてゐる。兄弟と姉妹、第一、第二及び更らに遠い等級の從兄弟從姉妹はすべて互に兄弟姉妹であり、而して正にそれ故にすべて互に夫婦なのである。故に兄弟姉妹の關係は、この家族形態においては、當然相互的性交の實行を豫定するのである。

以上の二つの男女關係、即ち無規律性交によるもの、並に血緣家族によるそれは、最早存在せぬ。歷史の物語る最も粗野な民族においてすら、それを證據立てる何等の實例をも與へないのである。乍併、エンゲルスは、それは嘗て存在したものでないければならぬといつてゐる。彼は曰く「實際吾々は、吾々が歷史において否定すべからざるものとして證明することが出來、且つ尙ほ今日諸所において、研究することが出來る最古の最原始的な家族形態として何を見出すか。先づ集團婚姻であるが、それは、男子の全集團と女子の全集團とが互に所有しあひ、そして殆んど嫉妬の餘地を殘さぬ形態である。そして「更らに後の發達段階において、吾々は、多夫一婦制の例外的形態を見出す。それはあらゆる嫉妬の感情を全く打破し、從つて動物には知られてゐないものである。然し、吾々に知られてゐる集團婚の諸形態は特に複雜な事情を伴ふものであつて、それは必然的により古く、且つより單純なる性交形態を顧みさせ、かくて遂には動物から人類への過渡に適應する無規律性交を顧みさせるほどである」と。それは一の推定である。モルガンの所謂ハワイ式血族制度から當然この狀態を推定し得ると考へたのである。

デカンのドラヴィディヤ族、ヒンドオスタンのガウラ族、アメリカ・インディヤン族においてはモルガンの所謂對偶婚（パアルヂングスエエ）の家族制度が存在してゐる。この婚姻形態は夫婦何れの側からでも容易に離婚することが出來る一夫一婦の狀態であるが、斯樣な夫婦の產兒は一般に認められてゐる。父、母、息、娘、兄、弟、姉、妹なる語はかくの如き父子兄弟の間に用ゐられてゐることは疑ひのないところであるが、その實

際に使用されてゐるのは、この根本的意義においてのみではない。例へば、イロクイオス族においては、自身の子を息子または娘と呼ぶのみならず、その兄弟の子をも同じく呼び、その兄弟の子は彼を父と呼ぶ。「また同じ種族の女は自身の子供も、その姉妹の子供をも、その子と呼び、その子は均しく彼女を母と呼んでゐる。乍併、彼女の兄弟の子は甥または姪、彼女はその叔母と呼ばれ、姉妹の子供は彼女の子供を從兄弟、從姉妹と呼んでゐる。

かやうな父母、叔父、叔母、子、兄弟、姉妹、從兄弟、從姉妹なる言葉は單に敬稱として用ゐられてゐるのではない。その言葉の内に血族關係の遠近、これに伴ふその義務關係を表示し、且つこれらの關係の綜合がこれらの民族の社會組織の中樞的要素をなしてゐるのである。モルガンはこのイロクイオス種族に行はれてゐる制度とハワイに行はれてゐる血族制度とを比較して更らに推定を試みたのである。

サンドウッチ諸島においては、第十九世紀の前半にいたるまで、アメリカ・インディヤン種族の血族制度に似て、然もある點において、一致しない制度が存在した。ハワイの家族制度にあつては、何等の例外なく兄弟、姉妹のすべての子供は兄弟姉妹と考へられ、彼等はその母、母の姉妹、その父及び彼の兄弟の子といはれるのみでなく、その兩親のすべての兄弟姉妹の子と見らるゝのである。かくアメリカ・インディヤン族の血族制度とハワイの血族制度とを對比して見ると、ハワイの血族制度はアメリカ・インディヤン族のそれよりも一層古い形態であり、アメリカ・インディヤン族が一度通過して來た家族の形態である。而して、ハワイ式血族制度も一の發展の産物でありとすれば、その以前の形態が存したことに疑ひないのである。それが人類の無規律な性交狀態である。

このことは如何にして證明せらるゝのであるか。エンゲルスは次のやうに說明する。曰く「そこで若しアメリカの親族制度が、まだハワイでは實際に見出されるが、アメリカにはもはや存在しないところの、より多く原始的な家族形態を前提するとすれば、他の一方において、ハワイの親族制度は更らに一層原始的な一家族形態を吾々に指示するものである。そして、この家族制度たるや、吾々はもはやこれを何處にも存在するものとして證明することは出來ないが、而も嘗ては存在したものでなければならぬ。といふのは、若しさうでなければ、それに相應する親族

制度は發生することがなかつたであらうからである。モルガンは言ふ。『家族は能動的要素である。それは決して靜止的なものではなくて、社會がより低き段階から、より高き段階に發達するにつれて、よき低き形態からより高き形態に進歩する。これに反して、親族制度は受動的である、それは長い中間を隔てゝのみ、家族が時の經過のうちになした進歩を記錄し、そしてまた家族が急激に變化した時、その時にのみ急激な變化を經驗する』と。マルクスは更らにいふ。『そしてそれは一般的に政治上、法律上、哲學上の諸體系についても同樣である』と。家族が生命を續けてゐる間に、親族制度は骨化し、また後者が習慣的に存續する間に家族はこれをつき拔けて發達する。然し、巴里附近で發見せられた有袋動物の骨片によつて、それは有袋類に屬すること、そしてそこには嘗て既に絕滅した有袋類が住んでゐたときキュヴィエーが結論し得たと同じ確實さをもつて、吾々は歷史的に傳來せる親族制度によつてそれに適應するには絕滅せる家族形態が存在したことを結論することが出來るのである」。（Der Ursprung der Familie, Ss. 11-12. 西雅雄氏譯本一八—二〇頁）

六

モルガン＝エンゲルスの推定は果たして正鵠を得たものであるか。即ち何等かの積極的方法をもつてこれを證明する道があるか。この原始無規律的性交の存否の問題に關しては、二つの學說がある。即ち無規律性交狀態の存在を肯定するものと否定するものとである。後者の中の一見解は甚だ古くから行はるゝ學說で、家族制度をもつて人類に特有なるものとなし、しかもそは當初より純粹なる一夫一婦制を基礎とするものとなした。この說は主として宗敎及び道德的見地から主張された說であつて、基督敎によつて支持されて來つたのであるが、社會現象における進化論的見解は家族制度が人間特有なるものでないことが論證せらるゝに及んで、この說は一の獨斷論として排斥せらるゝに至つたのである。この說に代つて家族社會學の領土を占領したものが、マックレナン、バッハオフェン、モルガン、エンゲルなどの學說であつた。この說はリッペルト、ウェルケン、コオラア、ポスト、ベルンフェフト、ヘルワルト、スペンサア、ラッツェル、アヒリス、ランプレヒト、ミュラア・リヤなどによつて、讃同せられたのであるが、この原始的無規律性交狀態

の存在の主張は大膽なる假定の上に立つものとしてこれを斥けんとする數多の學者がゐる。即ちエンゲルスは既にウエスタアマアク及びルツルノオを擧げて、原始的無規律性交狀態の否定をもつて、近時における一の流行なりとしてゐる。その他吾々は、シュタルク、エルンスト・グロッセ、クロオレエ、アンドリュウ・ラング、アトキンスン、ノオスコオト・トマス、ウイルヘルム・ヴント、フォレル、クウレンベックなどを數へることが出來るのである。以下第二說の第一說に對する批評の要點とその批評の批評とを試みやう。

第一の根據は人類に最も近い動物にその根據を求めることである。即ちゴリラ、シンパンゼなどの類人猿の例に求めるのにある。類人猿は個別的家族において生活してゐる。故に人類もその初期においては、類人猿の同じやうに個別的家族の生活を營んでゐたのであらう。けれども類人猿は決して人類の直接の祖先ではない。類人猿は高々人類に對して傍系血緣動物であつて、祖先ではない。而して類人猿が依然として猿類の段階を超越し得ないのは、彼等に社會的本能なきためであり、從つて文化創造の力を有さないためである。エンゲルスの既にいつてゐる如く、この階段における人類は全然類人猿とは異れるものである。

次に最低の文化階段に生活してゐる野蠻人は同じく非社會的であつて、分離的な個別的家族を形成してゐると主張する。然るにこの主張は現在の最低文化階段に生活してゐる人類は何處においても、一の社會的群團をなして生活してゐる。生活狀態が甚だ困難な場合においても群團を爲す。このことは個體に缺けてゐる防禦力と生產力とを增進せしめるからである。

第三の根據は次の如くである。今假りに一歩を讓つて野蠻種族が群團において生活してゐるとしても、この群團を組織するものは、個別的家族である。吾々は初期血緣的家族制時代における個別的家族の存在から、原始時代の個別的家族の存在を推定することを得る。この主張は恰時現時において蓄妾が禁ぜられてゐるから中世においても禁ぜられてゐたと主張するのに異らない議論である。

第四の根據は自然民族の大多數は、少數の例外を除いては、一夫一婦の狀態で生活してゐたとなすものである。この主張も二つの概念即ち文化人の一夫一婦制と自然人の對偶婚（パアルンクス・エエ）とを混同してゐる。自然人にあつては對偶婚が成立すると共

に、所謂能力的一夫多妻制 fakultative Polygamie が成立する。即ち比較的富める者は多妻を蓄へ、貧者は一時的一妻を有するに過ぎぬ。後者の場合はこれを止むを得ざる一夫一婦制 Monogamie der Notdurft であつて、この止む得ざる事情の消滅するに至れば直ちに、この一夫一婦制は崩壞するのである。

第五の根據は人間の性質そのものから出發するもので、人間の一般に孤立を欲する傾向を有すといふにある。これは事實ではない。自然民族にあつては、群生活への傾向は甚だ強烈であつて、孤立は自然人に對しては一の刑罰を意味する。孤立を欲する感情は人類初期からの感情ではなくして、高期文明時代に至つて始めて成立した感情である。故に勞働者や農民に社會共同生活への傾向強く、都會人に至つて、始めて、著しく孤立的感情を發達せしめたのである

第六の反對理由は男女の人口數が平均してゐるといふ點から、一夫一婦をもつて自然の計畫（プラン・デ・ア・ナツア）であるとするのである。この男女人口の平均なる事實は必ずしも、一般的の現象ではない。例へまた男女人口の平均なる事實が存在してゐても必ずしも、これが一夫一婦制を形成すべき根據にはならぬ。例へば、十人の男子は十人の女子と一夫一婦としても、團體婚姻においても、その性的生活をなし得るからである。

無規律性交の行はれるべき基礎である群團（ホルデ）において人間が生活してゐたことは甚だ有力に立證されてゐる。人間の言語はこのことを語るべき最も有力なる證左である。人間の有するやうな發達した言語は廣大なる發展の過程を必要とする。而して言語は人間における一の交通の用具であるが故に、非社會的動物に對しては言語の發達は不可能なることである。前人（フオアメンシユ）は言語の發達と共に人類に進化した。故に原始人（ウアメンシユ）のみでなく、前人もまた社會的存在であらねばならぬのである。言語のみではなく文化もまた社會的生物の所產である。文化は思索し、會話する動物の共同作用の一表現である。而して人間の力は多數者の結合にある。故に孤立的個別的家族にあつては、親と子供とが直ちに分離するが故に文化が發達しない。何となればこの場合においては、文化集積の繼續性の條件が缺けてゐるからである。

無規律性交狀態に對する道德的否定、即ち、現時の道德から見て、かくの如きこと

はあり得ずとなすもの、または人間心理の不變を信じて、例へば、人間には生得の性的羞恥心、性的嫉妬、貞操の觀念ありといふ點からの反駁に對しては、道德の可變的性質並に、これらの諸感情が人に生得的不變的に與へられてゐるものでなくして、その內容の可變發達を示すべき幾多の例證を有することを擧げたのみで答へ得られやう。以上のやうな根據から人間最初の共同生活體は群團であつて、その內部においては、無規律なる性交狀態が行はれてゐたと推定するのである。（この項については Müller-Lyer, Die Phasen der Liebe, Die Familie 參照のこと）。

七

家族の第二の形態は集團婚の家族またはプナルア家族である。家族組織における第一の進步が、親子相互間の性交を禁止することにあつたとするならば、第二の進步は兄弟姉妹の間の禁止にあつた。恐らく個々の場合においては肉身即ち母方の姉妹を除外することをもつて始まり、それが漸次規則となり、遂には遠緣の姉妹、即ち姉妹の子、孫、曾孫の間においてすらも婚姻が禁止せらるゝに至つたのである。野蠻の中期に至るまで、例外なく廣く行はれてゐた原始的共產主義的合同世帶は各々事情によつて異りはするが何處においてもほゞ一定せる家族團體の最大限度を制約した。一人の母の子供等の間の性交が不當であるといふ觀念が生ずると、かやうな舊世帶團體は解體して新らしい團體が形成せらるゝに至つたのである。新世帶團體においては、一系列又は數系列の姉妹が一集團の核心となり、彼等の兄弟が他の集團の核心となつた。かくて、モルガンによつてプナルア家族と呼ばれた新らしい家族形態が現はれたのである。ハワイの慣習によれば、肉身又は遠緣の姉妹の一組が、彼等の共同の夫の共同の妻であつた。乍併、彼等の兄弟はそれから除外せられてゐた。これらの男子も最早互に兄弟と呼ばず、プナルア Punalua 即ち親密なる仲間、または組合員（アソシエ）と呼んだのである。同樣に肉身または遠緣の兄弟の一組はその姉妹でない一組の女子を持ち、これらの女子も互にプナルアと呼んだ。その本質的の特徵は、一定の家族群內において夫と妻とを互に共有すること、然し、その中から最初は肉身の、後には遠緣の妻の兄弟、及び、反對に夫の姉妹が除外されてゐたことである。これが家族形成の古典的容姿であつた。

すべて集團家族の形態においては誰が子供の父であるかは確かでないが、誰が

その母であるかは確かである。集團婚姻における妻は家内中のすべての子供を彼女の子供と呼び、且つ彼等に對して母たる義務を持してゐるにしても、彼女に對しては肉身の子供は甚だ明瞭である。かく集團婚姻の存在する限りにおいて、血緣はたゞ母方によつてのみ證明することが出來る。從つて母系のみが認められることは明かである。これは實際すべての蒙昧及び野蠻の下期に屬する民族において見るところである。この事實の發見者はバッハオオフェンで、彼はかやうに專ら母によつて血統を認識すること及び時の經過と共にそれから生じた相續關係を母權（ムツタアレヒト）といふ名稱で呼んだのである。

この集團婚姻の原始的形態を吾々はオオストラリヤにおいて見ることが出來る。オオストラリヤでは屢々大陸全體に分布してゐる男子の全階級と同樣に廣い範圍にわたる女子の階級との間の階級的婚姻、集團的婚姻狀態が存在するのである。

このオオストラリヤにおける階級的集團婚姻は漂浪する蒙昧人の社會狀態に適應する形態であり、プナルア家族は既に共產主義的共同團體――氏族の制度は大抵の場合直接プナルア家族から起つたものらしい――の比較的固定した定住を前提とするのである。そして直接に次のより高度の發達階段に至るのである。

八

家族の第三の形態は配偶家族 Paarungsfamilie である。配偶家族は蒙昧と野蠻との境界において發生した。集團婚姻の蒙昧におけるが如く、また一夫一婦制の文明におけるが如く、それは野蠻における典型的家族形態である。血緣者婚姻に對する制限の制定が益々その範圍を擴張して來ると、集團婚姻は益々不可能となり、配偶婚姻のために、その地位を讓らざるを得ないやうになる。この關係においては一人の男子は一人の女子と同棲する。けれども一夫多婦制と時々貞操を破ぶることとは男子の權利として認められてゐる。一方において妻はその同棲を續ける間最も嚴格にその貞操が要求せられその姦通は從つて、處罰せらるゝ。乍併、配偶婚姻における女子は比較的自由であつて、何等男子によつて抑壓せらるゝ事實はないのである。血緣關係の婚姻禁止の領域の擴大は、今や男子によつて女子の不足が感ぜられるに至つて、一種の女子掠奪及び賣買が行はれて來たのである。

しかし、配偶婚姻は前代から人類が繼承してゐる共産主義的生活を崩壞せしめるものではない。而してエンゲルスによれば共産主義的生活は一家内における女性の支配を意味してゐる。即ち女性が概ね又は全部同一氏族に屬してゐたにも拘らず、男子は種々の氏族に分れてゐた共産主義的生活は原始時代において一般に行はれてゐた女性の優越的支配の物的基礎であつた。

然るに生産力の發達、即ち家畜の馴養及び畜群の飼殖が今まで豫想もしなかつた程の富の源泉を發達させ、從つて全然新らしい社會關係が作り出されたのである。この新らしい富は勿論最初には氏族に屬したのであるが、早くから畜群に對する私有財産が發達したやうである。この私有財産の所有者は各戸における男子であつた　この時期において、また奴隷が現はれてゐる。故に男子は一方において畜群から多くの富を獲得すると共に、戰勝の結果たる奴隷の經濟的利用によつてまた多くの富を集積することが出來た。然るに集積せられた富は從來の氏族制度における慣習によれば、氏族そのものが相續した。即ち母權制の社會にあつては、母の屬する氏族のみが相續した。かくて富が增大すればする程、それは一方男子に家族において女子よりも重要なる地位を與へ、彼はこの强められた地位を利用して、在來の相續順位を變更することに努力した。而してこのことは成し遂げられたのである。かくて女系による血統の數へ方及び母方の相續權は廢棄せられて、父方の血統及び相續權が確立せられたのである。

こゝで成立するに至つたのが男子の專制的支配である家長的家族である。その特徴は一團の自由人及び非自由人(奴隷)が家長の父權の下に一家族を組織することである。猶太人の形態においては、家長は一夫多婦制のうちに生活し、非自由人も妻、子を有し、そして全組織の目的は一定の地域に畜群を放養することである。即ちその本質は非自由人と父權との合體である。この家族形態は配偶婚姻から一夫一婦への過渡を示すものである。妻の貞操は子供の父性を確保するために、嚴格に要求せられ、妻は夫の權力の下に無條件に服從するのである。即ち母權制の顚覆は女性の世界史的敗北であつた。男子は家庭においても支配者であり、女子は貶下され、隷屬せられて、男子の情慾を滿足する女奴隷及び子供を生産する單なる道具となつたのである。

母權制の顚覆と共に發達したものは一夫一婦制であるが、家長的家族に附隨するものは、一夫多婦制及び多夫一婦制である。この二つの婚姻形態は同一の土地において並行して行はれない限りは、單に例外と見るの外はないのである。殊に一夫多婦制は明かに奴隷制度の產物であり、個々の例外的場合に限られてゐたのである。即ち一夫多婦制は富者及び貴族の特權に過ぎなかつたのである。

第四の家族形態は一夫一婦制であつて、それは野蠻の中期と上期との分界時代に配偶家族から發生する。一夫一婦制は爭ふべからざる父性を有する子供を作るといふ明白なる目的をもつて男子の支配の上に築かれたものである。この明確なる父性を有する子供は他日自身の相續者として父の財產を繼承しなければならないから求められるのである。一夫一婦制は婚姻の紐帶が遙かに堅固となつたことによつて對偶婚姻と異り、而してこの婚姻はもはや双方の隨意には解消し得ないものである。これを解消して、相手方を離別し得るものは通常夫のみである。

このことが一夫一婦制の起源であつた。それは決して個人的性愛の結果ではない。婚姻は依然として因襲的婚姻であつた。それは自然的條件ではなくして、經濟的條件に、即ち原始的な自然發生的な共有財產に對する私有財產の勝利によつて打ち立てられたる最初の家族形態であつた。故にエンゲルスは曰く

「かくて一夫一婦制は決して男女の和合として歷史に現はれたのではなく、況んや、その最高の形態として現はれたのでもない。正反對だ。それは男子による女子の壓迫として、歷史以前の全歷史に未だ曾て知られなかつたところの兩性間の抗爭の宣言として現はれたのである。千八百四十六年にマルクスと私とが書いた古い未刊の原稿の內に私は次の言葉を發見する『最初の分業は子供を生むための男女間の分業である』。そして今や私はこれに次の如く附加へることが出來る。即ち、歷史に現はれた最初の階級對立は一夫一婦制おける男女の敵對と一致し、そして最初の階級壓迫は男性による女性の壓迫と一致すると。一夫一婦制は一つの大なる歷史的進步ではあつたが、それと同時にそれは奴隷制及び私有財產と共に、如何なる進步も同時に相對的の退步であり、一人の幸福と發展には、他の者の苦惱と萎縮とによつて遂行されるところのかの今日まで

續いてゐる時代を開いたのである。それは文明社會の細胞形態であつて、これにおいて既に吾々は、文明社會において完全に展開されつゝある對立及び矛盾を研究することが出來るのである。」(Ursprung der Familie S. 52. 西氏譯九一頁)(完)

× × ×

エンゲルスの家族論は以上論述したところから現在及び將來に及んでゐる。而して、彼の原始家族論はその氏族制度論と密接な關係のあることは以上の論述でも明かであるが、この點は別の機會において問題の多い氏族制度論を起草するつもりであるから、その機會に讓つたのである。同じく家族の現在及び將來についても、一般社會制度との關係を論ずることが必要であるのでこれも別の機會に論ずることゝした。エンゲルスの「家族、私有財産及び國家の起源」は西雅雄氏によつて邦譯されてゐる。筆者はその譯文を借用したところが甚だ多い。少數なる瑕瑾を除いては、甚だ通讀し易き名譯である。エンゲルスの理論的立場一般については Max Adler, Engels als Denker. Vorländer, Marx, Engels und Lassalle als Philosophen. が最もよく書いてゐると思ふ。

唯物史觀と彼との關係については、筆者の小論「唯物史觀とエンゲルス」(社會科學一九二六年十月特輯唯物史觀號所載)において少しく論じて置いた。

千九百二十七年十一月十六日夜稿了、